ジャム・ギヨーム　1844-1916

フリッツ・ブルップバッヘル[1]によるジャム・ギヨーム

ジャム・ギヨームは一八四四年二月十六日、ロンドンで生まれた。父は、ヌーシャテルのスイス人であったが、イギリスに帰化していた。母はフランス人であった。父方の家族はトラヴェルス渓谷のフルーリエ村に住んでいた。祖父はそこに一八一五年ごろ時計店を開き、ロンドンに支店を設けた。彼は共和主義者であって、一八三一年の暴動の結果、ヴォー州に一、二年逃亡しなければならなくなった。ジャム・ギヨームの父は、二十歳のとき、すでにりっぱな時計屋であったが、伯父に代わって支店を経営するためロンドンにきた。彼は世間並みの人間ではなく、時計の商売よりも文明のほうに心をひかれた。彼は暇な時にドイツ語とスペイン語を覚えるだけでは満足せず、なお、とくに興味をいだいていた自然科学とまた哲学を勉強した。彼は一八四三年に、音楽家の家に生まれた非常に教養ある若い娘と結婚した。

一八四八年、ヌーシャテルに共和制が宣言されると、熱烈な共和主義者である父は、故国に帰った。彼はすぐ判事に、ついでヴァル・ド・トラヴェルスの知事に任命され、この時以来公務のみにたずさわった。一八五三年には参事院議員に選ばれ、三十五年間ひきつづいて再選された。

こんなわけでジャム・ギヨームは、スイスにきたとき四歳であった。彼は九歳半でラテン語学校に入学した。十六歳で、今日ではアカデミーとよばれているクラスに移り、一八六二年までそこにいた。かなり手に負えない生徒であった彼は、王党派で宗教心の強い学校当局者としばしば悶着を起こした。しかし、わがままな振舞いのために一年中悪い生徒として注目されてはいたが、試験はきちんと受け、いつも首席であった。彼の学校生活で

重要なのは、彼がクラスでやったことではない――彼は先生たちのいうことを聴きもしなかったし、彼らを信頼もしていなかった――。それは、彼が独りで学ぼうと欲したことであり、彼の頭の中に発酵したものである。彼は父の蔵書をすべて読み、古代に、フランス革命に、哲学に、とくにスピノザに、ホメロス、シェイクスピアからゲーテ、バイロンにいたる詩に、ついではラブレー、モリエール、ヴォルテールに情熱を燃やした。

種々の自然科学、天文学、地質学、昆虫学等もまた彼の心に多くを占めた。彼は自分を詩人であり、音楽家であると思った。たくさんの抒情詩を書き、劇と小説を作り、オペラとオラトリオを編曲した。政治もこれに劣らず彼の関心をひいていた。共和主義者と王党主義者との闘争はヌーシャテルで激化していた。当時、フランス革命の歴史はギョームをひきつけ、彼の英雄は山岳党の人人、ヌーシャテル人のマラーやロベスピエール、サン＝ジュストであった。

ギョームは一八六二年九月、チューリッヒに赴いた。彼は哲学を学び、学業を終えて古代語の教授になる準備をするはずであった。彼はケヒリイの主宰する哲学・教育学研究所に入所した――この若い反権威主義者が教えを受けた教授たちのうちで、重要と考え、いまもそう考えているのは、ケヒリイと美学者ヴィシェルの二人だけであった！――ギョームはチューリッヒで詩と哲学についてドイツの天才を知ることを学んだ。彼はまたギリシャ文学にもかぶれた。彼が、スイスの小説家だがすぐれたドイツ語作家ゴットフリート・ケラーの『ゼルトヴィラの人々』の翻訳をはじめたのは、チューリッヒにおいてである。ケラーの作品をフランス語に移したのは、ギョームが最初で、それは一八六四年に出版された。当時の彼にはまだ社会主義はほとんど存在しなかった。少し年下のある友人が、プルードンに対する熱烈な讃美をうち明けたとき、プルードンはソフィストだというのがギョームの答えであった。

一八六四年春、ギョームはヌーシャテルに帰ることを余儀なくされた。彼は、パリでやろうとあてにしていた研究の旅を非常に惜しみながら断念しなければならなかった。彼はその年の暮れに工業学校の教授の試験にパスし、ロークル・コレージュで職をえた。……彼はまだ社会主義者ではなく、これまでただ研究と書物の間でだけ生活してきたことを想起してほしい。ロークルでは労働する人々のさ中に移ったのである。彼は注視する、心は動揺し、理性はいらだつ。彼は真理にたいする情熱を抱いていた。それは彼のうちに正義への情念をかきたてる。古典に関する知識の誇りが彼の心を打ち、彼はかつての未来計画を思って肩をすくめる。詩人としての彼は、歌うことをやめ、生き生きとした詩の叫びに耳を傾ける。歴史家として彼は、革命は成就したのか、いや革命ははじまったのかとさえ自問する。彼は、己れの生を生きるに足るものにするため、それを民衆の一般教育に

捧げようと欲する。そしてその手初めに、徒弟たちのための夜間講座を設ける。彼はあらゆるたぐいの著者、ダーウィン、フーリエ、ルイ・ブラン、プルードンを読みつづける。少しずつ新しい考えが彼の頭の中に練りあげられる。博学で哲学者である彼は、以前にはロベスピエールやルイ・ブラン流にしか、平等を考えることができなかった。人間は魂をもつ以上、すべての魂の平等は当然のことであった。しかしどのようにして平等を、ダーウィン主義、動物からの由来、生存競争と一致させるか？　そして道徳は、自由意志がないとすればどうなるのか？　これらの問題が長いあいだ彼を苦しめた。形而上学的な自由意志をついに否定せざるをえなくなったとき、彼は平静に確固たる地盤にいる自分を見出した。

しかし彼の思想はまだ中心を欠いている。そして社会主義も、この教授、形而上学者の心にはいぜん明確でない。フランスの協同組合運動がスイスに影響を及ぼしてくる。これは夜間講座での関心を煽らずにはいない。一八六五年、インターナショナルの支部（ジュラ）がラ・ショー・ド・フォン（ヌーシャテルの一都市）に建設された。だから自ら助くる者は、人が助けるに値するというわけだ。潑剌として献身的で忍耐づよい、生死を堵した人間と出会うことがまだ残されていた。ギョームが、ヌーシャテル暴動の老闘士、かつて革命と共和制以外には何も知らなかった革命家・共和主義者、コンスタン・ムーロンのうちに讃美し敬愛したイメージがこれであった。

このとき以来、ギョームは成人した。彼は行動を欲し、なぜ行動すべきかを理解する。なぜか、彼はなお躊躇する。ムーロンのコンスタンが細工師になったように、彼は、民衆にいっそう近づくために田舎の教師に、ついで活版屋になろうとも考える。人々は、彼がいまの階級から落伍するならば、いままで及ぼすことのできた有益な影響をすべて失うであろうことを説明して、彼にそのどちらをも思いとどまらせた。

一八六六年の秋、コンスタン・ムーロンとジャム・ギョームとはロークルにインターナショナル支部を設立し、ギョームはジュネーヴ大会に赴いた。

それまで彼は労働者の一般教育に身を捧げ、しばしば歴史に関する講演（これはのちに印刷された）やまた信用および消費協同組合組織の企てにも献身してきた。彼はなお政治運動や議会運動にも積極的に参加したが、間もなく、ジュラのインターナショナル員の大部分と同じように、そうした運動では労働者は何も得るところはなかったという確信に達した。ローザンヌでのインターナショナル大会、一八六七年ジュネーヴでの「平和・自由同盟」の大会は、ギョームの思想を根本的に変えた。それら大会で、彼は実際全ヨーロッパの革命家たちと接触をもち、世界的な社会革命への信念を抱くにいたった。

彼が、一八六九年ロマン語地方連合創立の当時、バクーニンと知り合ったのは、こうした思想発展の時期においてであった。二人の見解はまったく相似ていた。国家

のない、もはや政府も憲法も存在せず、すべての人々が自由で平等である社会についての夢想は、ギヨームの中に、バクーニンを知る以前から内的発展と外的経験とによって形成されていた。しかし二人のどちらにとっても、相手を見出したのは重大なことであった。

「私は、道徳的見地からして――とギヨームは書いている――次のことをバクーニンに負っている。すなわち、私は前には禁欲主義者で、私の人格の道徳的発達に専念し、理想に生活を合致させようとつとめてきた。バクーニンの影響で私はこの個人的関心を放棄し、これを、より人間的、より社会的な物ごとをとおしての道徳的完成への努力に代えるほうがいっそう価値があると考えた。すなわち純個人的な行動を棄て、共同活動への献身を決意し、宣伝と革命との共同事業に働くために緊密に団結した人々の集合意識のうちに、道徳性の基礎と保証を求めることである」

彼がそれを実行したかどうかはよく知られている。一八六六年から一八七八年まで、ギヨームはひたすらインターナショナルのために生きた。彼は一八六八年にエリズ・ゴレイと結婚した。実際運動に従い、迫害を受けている者の手に自分の手を託したこの勇敢な若い娘に、敬意の思い出を捧げよう。事実、六九年以後、ギヨームは革命家としての活動のゆえに教育当局と争いを起こし、ロークルでの教職を辞めなくてはならなかった。彼は活版屋になり、一八七二年までこれをつづけた。一八六六年から一八七八年までの彼の生活を語ることは、インターナショナルの歴史を語ることであろう。彼の回想記がその歴史の一つをなしたゆえんである。彼は、バーゼル大会で結成され、有名なハーグ大会での権威主義派と反権威主義派との分裂とともに解体した左派の、最も熱烈な代弁者の一人であった。ギヨームの思想的発展については、彼の人格的、知的および道徳的能力を別にして、彼が並み外れた精神的活動力をそなえた労働者階級とともに生活し活動したという幸運に、あまりにも多くの重要さをおくことはできないであろう。ギヨームが同志たちに与えたものと、彼らから受けたものとを区別することは困難である。当時のジュラの闘士たちは、広大な精神的共同体の中に真実融け合っていた。そこでは人々はともに感じ、ともに考え、ともに活動した。指導者もいなければ、指導される者もいなかった。多少とも決定的な発意と、多少とも豊かな天分のままに生きる人々だけであった。だが、ある者の労働がどこではじまり、他の者の労働はどこではじまるのか、これを骨を折って探究してもむだである。

したがってギヨームは集団の知的解放を考える。……それだからこそ、ジュラにおいて時計職人たちとギヨームとがいっしょになって、新しい世代が革命的サンジカリズムの名で再び見出し、命名し直すべき思想を生みだしたのである。

人は一八七〇年以来すでに、西部スイスでは、社会民主主義的および革命的サンジカリスト的と今日呼ばれている二つの傾向が、相対立していたのを見ることができる。一八七〇年には、ラ・ショー・ド・フォンでのロマン語地方連合大会で最初の分裂が起こった。そこでなされたささいなことが、一八七二年には大々的になされなければならなかった。ギヨームは当時「集産主義者」（革命的サンジカリスト）の機関紙『連帯』（ラ・ソリダリテ）を編集していた。これはパリ・コミューンと、ついでジュラの人人の間に生じた危機の後までつづいた。その後、彼はこの『連帯』にかわった『会報』（ブレティン）の編集者となった。

パリ・コミューンが圧殺されると、権威主義派と反権威主義派との闘争は、インターナショナルの内部でこれまで以上に激烈になった。マルクスはロンドン大会で反権威主義派、とくにジュラ連合の人々を攻撃した。その結果、反権威主義派全体の結束はいよいよ緊密になり、両派の敵意は強められた。周知のように、バクーニンとギヨームとは一八七二年ハーグ大会で、インターナショナルから追放され、こうしてマルクスと彼の仲間たちは反権威主義の精神を一掃したものと思った。ここは、マルクスがこの目的を達するために用いた手段について語る場所ではない。その詳細はギヨームの『ランテルナショナル』[2]で読むとよい。

ハーグ大会前からギヨームはつねに第一線に身をおいていたが、大会後は、彼を無視してインターナショナルのその後の発展を考えることはまったく不可能になる。

マルクスとの対立にはきわめて異質のものがあった。この対立を集中し維持するには、多くのさまざまな個性の真価を認めることのできる包容力ある精神が必要であり、これこそは共同の作業を可能にするものであった。これが、ギヨームが理解し、またみごとに果たした役割であった。自分自身明確な観念を抱きながら、自分とは異なる人々の観念の中にはいりこみ、その真価を評価しうることは、普通の人間の間ではめったにあることではないが、これこそはギヨームの特質をなすものであり、またこれゆえにこそ彼はインターナショナルの精神的争いにかくも多くの働きをしたのである。人々は実際、彼が語ったことすべて、彼が書いたものすべてのうちに、狂信主義からも折衷主義からも等しく自由な、高潔な道徳的人となりを感ずるのである。

……一八七〇年以後インターナショナルは、経済的および政治的発展のうちにとらえられ、闘士たちのあらゆる働きにもかかわらず、死滅せざるをえなかった。ヨーロッパ労働運動はもはやそれ自体としては考えられなくなり、諸国民の運動に分裂した。ヨーロッパの他の地方におけるごとく、ジュラにおいても叛逆の精神は低下した。ギヨームが編集したジュラ連合の機関紙で、また少なくとも数年間は反権威主義派インターナショナルの機関紙であった『会報』も、一八七八年には刊行を停止せざるをえなくなった。

社会組織に関する諸理念[3] 1876

（ジャム・ギヨームによる）

I 前書き

これから読む諸理念の実現は、革命運動を手段としてのみ達成することができる。

波浪は一日にして、それを支えている堤防を壊す地点にまで高まりはしない。しかしひとたびその水位に達すると、決潰は突然にして起こり、堤防は一瞬にして崩れ去る。

だから相次ぐ二つの事実が存在するわけであり、その第二の事実は第一の事実の必然的結果である。最初に、観念、欲求、行動手段の緩慢な変化が行なわれる。ついで、この変化が十分に進展して全面的に事実に転ずる時期がくると、急激な決定的危機すなわち革命が起こる。革命は、長期にわたる進化の結末、久しい前から準備され、避けられなくなった変化の突然の発現にほかならない。

社会改新の序曲たる革命を達成する手段方法をあらかじめ示すことは、誠実な何びとの心にも浮かばないであろう。革命は自然的な事実であり、一人または多数の個人的意志の事実ではない。革命は予想した計画にのっとって行なわれはしない。それは、何びとも左右することのできない必然性の確証しえない衝撃のもとに起こるのである。

したがって人々はわれわれに、革命闘争の計画を指示することを当てにしてはいない。こうした児戯に類することは、人類解放の事業を達成するのに、個人的独裁の可能性と有効性とをいまも信じている人たちに任せるとしよう。

われわれとしては、革命が過去のまちがったやり方に再び陥るのを避けるため、それにとらせたいと望む性格がどのようなものであるかを手短に語るだけにしよう。この革命の性格は何よりもまず否定的、破壊的であるにちがいない。問題は、過去のいくつかの制度を改善して新しい社会に適応させることではなく、それらを廃棄することにある。かくして、政府、軍隊、裁判所、教会、学校、銀行およびこれらに付属するものいっさいを根本的に廃棄することになる。

革命はこれと同時に積極的側面を有する。革命は労働者による労働用具と全資本との掌握である。

この掌握をわれわれがどのように理解するかを語らなくてはならない。

まず土地と農民について話そう。

多くの国々、とくにフランスでは、ブルジョアと聖職者とは、農民に、革命は彼らの土地を奪い取ろうとするものだと語って、彼らをだまし、脅かそうとつとめてきた。

これは民衆の敵たちの憎むべき虚偽である。革命はそれとまったく逆のことをしようとしたのだ。革命は、ブルジョア、貴族、聖職者から土地を取り上げ、それを土地のない農民に与えようとしたのだ。

土地が農民のものであり、しかもこの農民が自分で耕しているならば、革命はそれに手をふれないであろう。逆に革命は彼にその土地の自由な占有を保証し、それに課せられたすべての租税を免除するであろう。革命は、労働者を解放すると同じように、国庫に税を納め、重い抵当を負わされた土地をも解放するであろう。租税も抵当も不用である。土地もまた人間と同じく自由になる。

ブルジョア・貴族・聖職者の土地、田舎の貧しい人たちが今まで主人のために耕してきた土地についてはどうかというと、革命はそれらを盗み取った人々から取り戻してその正当な所有者、それを耕す人々に返すであろう。

革命はどのようにしてブルジョア階級、搾取者から土地を取り上げて農民に与えるのか？

これまでブルジョアは、政治革命を実行し、その結果、たんに民衆にとって支配者の変更であるような運動の一つを遂行したときには、法令を発布するのを慣わしとし、新政府の意志を国中に告げた。法令は自治体と県に掲げられ、裁判官、市町村長、憲兵はこれを施行させた。

真に民衆のものである革命は、この例にならわないであろう。それは、法令を作りもしなければ、警察や行政府の職務を要求もしないであろう。革命が民衆を解放しようと欲するのは、法令や紙に書かれた言葉によってではなく、行為によってなのだ。

II 農民

ここでは、農民が彼らの労働用具すなわち土地から可能な最大の利益を収めるには、いかに自らを組織すべきかについて検討しよう。

革命の翌日、農民の状態はこうである。すでに小所有者であった者たちは、彼らが耕していた一片の土地を保有し、それを家族だけで耕しつづけるであろう。他の、これが大多数の場合であるが、大土地所有者の小作人または小作人に使われるただの働き手たちは、共同で広い土地を手にいれ、それを共同で耕すことになる。

この二つの方式のいずれがまさっているか？

ここでの問題は、理論をつくりあげることではなく、事実を出発点として、直ちに実現しうるものを探究することである。

われわれはこの見地に立ってまず最初にいいたいの

は、本質的な事柄、そのために革命が行なわれた事柄が成就されていることである。すなわち土地がそれを耕す者の所有となり、農民はもはや彼らの汗のおかげで生きる搾取者のために、働かないことである。

この大きな獲得がなされると、自余のことは第二義的である。農民たちは、彼らにその意志があれば、土地を個人個人の持ち分に分割し、あるいは反対に共有にし、共有地を耕すために団結することができる。しかし、土地の耕作と占有とのために採用すべき最上の形態というこの問題もまた、農民の解放という本質的事柄にくらべれば第二義的ではあるにせよ、慎重な検討に値するのである。

革命前、小土地所有農民が居住し、土質が大規模な耕作にほとんど適せず、農作業はいぜん家父長制時代のやり方のままに残り、機械の使用は知られていないかあるいはほとんど広まっていない地方——このような地方においては、農民は彼らが慣れてきた所有の形態を保持するのが当然であろう。各自が、過去にやってきたように、自分の土地を耕しつづけるであろう。ただ一つちがうのは、彼らのかつての奉公人たち（それがいたとして）が、彼らの協力者となり、共同の労働で土地に産ませた生産物を、これら協力者と分け合うことである。

しかしおそらくこれら個人的所有者のままであった農民たちは、少しの時がたつうちに、彼らの伝統的労働方式を変えるのが有利なことを知るであろう。彼らはまず最初に生産物の販売および交換に当たる共同の機関を設けるために団結するであろう。ついでこの最初の団結は、彼らを導いてそれと同じ方法ではなしに、もろもろの団結を企てさせるであろう。彼らはその労働を楽にする種々の機械を共同で獲得するであろう。彼らは、大ぜいが腕を合わせて手早く片づけるとき、いっそうよく仕上げられるような骨折り仕事を果たすのに助力し合うであろう。そしてついにはおそらく彼らは、彼らの兄弟たち、工業労働者や大農地の労働者にならって、彼らの土地を共同化して農業組合を結成するであろう。だが、もし彼らが何年もそのまま旧いしきたりをつづけるとしても、いくつかの村では農民が集団所有の形態を採ることに加わるまでまる一世代も経たなければならないとしても、この点に大して不都合はないであろう。農村のプロレタリアートは消滅していないであろうし、またおくれたままのこれら村々の内部には、豊かさと平和に暮らしている自由な労働者住民以外のものが存在するであろうか？

これと反対に、大所有地、大規模耕作が著しい数の労働者を占め、その土地を耕すには彼らの結合し団結した努力が必要な地方においては、集団所有が自然に迫られてくる。人々は、一コミューン全体の土地、ときには多数コミューンの土地さえ、ただ一つの農業経営をなし、そこに大農法が採用されるのを眼にするであろう。これら田園労働者の大共同体においては、今日零細農民がわ

ずかな土地でやっているように、同じ土地から多くのさまざまな産物を得ようと努力しないであろう。面積一ヘクタールの囲い地に、小麦やじゃがいもやぶどうや飼料作物やその他果樹などを植えた四角の小さな地面が、相並んでいるのは見られないであろう。一つ一つの土地は、その外面的地形により、その方位により、その化学的組成によってある種の作物により適している。したがってぶどうに適した土地に小麦の種は播かないだろうし、牧場としてよりよく利用できる土地からじゃがいもを収穫しようとはしないであろう。農業共同体は、土地の性質のみを利用するとすれば、ただ一種類の栽培だけに従事するであろう。というのは、大農法はより少ない労働ではるかに多量の結果を産することができ、また栽培に適していない土地でわずかな質の悪い物だけを収穫するよりも、不足する生産物を交換によって取得するほうがまさっているからである。

農業共同体の内部組織は必ずしもどこでも同じではないであろう。団結した労働者たちの選択によってかなりの相違が生じうるであろう。彼らは、平等と正義の原理に従うかぎり、この点ではただ自己の便宜と効用を考えればよいのである。

全構成員の選挙によって行なわれる共同体の管理は、一人に任されることもあれば、何名かの委員会に委ねられることもあろう。種々の管理機能を分割し、それぞれを特別の委員会に委託することも可能であろう。労働時間は全国に適用される一般法律によってではなく、共同体自体の決定によって決められるであろう。ただ、共同体はその地方の全農業労働者と関係があるため、この点についての統一的な基準を採用すべき協定が全労働者の間におそらく実現されるものと認める必要がある。労働生産物は共同体のものとなり、各構成員は共同体から、現物（食料、衣料等）なり交換貨幣なりで、果たした労働に対する報酬を取得する。ある共同体ではこの報酬は働いた時間に応じて支払われ、他の共同体では働いた時間と同時に職務の質とに比例して支払われ、その他種々の方式を試み、実行することも可能であろう。

この分配の問題は、所有の問題が解決され、大衆の労働の上前をはねる資本家がもはや存在しなくなれば、すぐにまったく第二義的となる。しかしわれわれは、可能なかぎり近づくことを求めねばならぬ原則は、各人からその力に応じ、各人にその必要に応じて、であると考える。機械方式と工業および農業科学の進歩とのおかげで、ひとたび生産が社会の需要を大いに突破するほどに増加するならば——しかもこのような結果は革命後数年にして達せられるであろう——、人々はもはや各労働者に帰属する分け前を綿密に計算しないであろう。各人は、豊富な社会的貯えの中から、決して消費しつくすことを懸念せずに、その必要のすべてにわたって引きだすことができるであろう。しかも、自由にして平等な労働者の間に発達するであろう道徳感情は、濫用や濫費を防

ぐであろう。さしあたり過渡期には、労働生産物を共同体員の間に分配する最も適切な方法を決定することは、共同体自体に任せられるのである。

Ⅲ　工業労働者

工業労働者についても、農民におけるごとく、多くの部類を区別することが必要である。

まず最初に、道具というものがほとんど重要でない職種がある。そこでは分業は存在しないか、あるいはほとんど存在しない。したがってそこでも孤立した労働者も、協同して労働する場合と同程度に生産することができる。たとえば仕立屋、靴屋等々の職業がこれである。[3]

つぎには、多数労働者の協力、いわゆる集合力の使用を必要とする職種がある。これは一般に仕事場や作業場で行なわれ、印刷屋、指物師、石工等がその例である。

最後は第三の部類の工業であり、ここでは分業ははるかに押し進められ、生産は巨大な階梯によって営まれ、強力な機械の使用と多大な資本の所有を必要とする。これが製糸工場、製錬所、石炭鉱業等々の場合である。

第一の部類の工業に属する労働者にとっては、集団労働は必要でなく、おそらく大多数の場合、仕立屋や靴屋は彼の小さな店で独りで働きつづけるのをよしとするだろう。これはまったく当然のことであり、小さなコミューンではたぶんこうした職業のどれかにたずさわる労働者は、一人しかいないであろう。だがわれわれは、個人の独立をなんら妨げようとはせずに、事が実行可能なところでは、共同労働のほうがまさっていると考える。平等な人々の社会では、競争は労働者を励ます。それは生産を増し、また仕事を誠実にやらせる。その上、共同労働は各人の全員に対する、また全員の各人に対するコントロールをより有効にするのである。

他の二つの部類の労働者に関しては、彼らの労働の性質自体からして団結を強いられ、また彼らの労働用具はもはや専用の簡単な道具ではなく、使用に多数労働者の協力を必要とする機械や道具であるため、これら機械や道具の所有は集団的でしかありえないことは明白である。

したがって各仕事場、製造所が、労働者の生産組合（アソシアシオン）を結成し、彼らは、各自の権利が保証され、平等と正義の原理が実行されるかぎり、好む仕方で自らを自由に運営管理するであろう。前節で農業労働者の組合または共同体について述べたさい、われわれはその管理や労働時間や生産物の分配に関する見解を示したが、これは当然工業労働者にも適用されるものであり、したがってここでくり返す必要はない。またいま述べたように、少し複雑な道具と共同の作業を必要とする産業の場合はどこでも、労働用具の所有は共同化されなければならない。しかしまだ決定すべき一つの点が残っている。すなわちこの共同所有が、それが機能している仕事場にもっぱら属

するのか、それともこれこれの産業の労働者の同業組合（コルポラシオン）全体のものになるのか、ということである。

われわれの意見では、第二の解決がすぐれている。たとえば、革命の日にローマの印刷労働者が市の全印刷所を掌中に収めるとき、彼らは直ちに全市の協議会を結成し、ローマの印刷所全部がその印刷工の共同所有であることを宣言するであろう。ついで、事が可能になるやいなや、彼らはさらに一歩を進め、イタリアの他の諸都市の印刷工と連帯関係を結び、こうした連帯協約の結果は、イタリアのすべての印刷所をイタリア印刷工連合の集団所有に構成することになるであろう。この共同化によって全イタリアの印刷工は、国のどこの都市へでも働きに行き、いたるところで使用する権利のある労働用具を見つけることができるであろう。

しかし、労働用具の所有が、われわれの考えでは、同業組合に引き渡されるべきであるにしても、これによって、仕事場を構成する労働者の集団の上に、思いのままに労働用具を処理する権力をもつ一種の産業政府が存在することをいおうとするものではない。いな、各仕事場の労働者は、同業組合とよばれるすぐれた力の掌中に獲得した労働用具をいささかも放棄はしない。彼らがやるのは、こういうことだ。すなわち、彼らが掌握した労働用具の享受をある条件の下で相互に保証し、他の仕事場の仲間にもこの利点を共に与えることを認め、そのかわりに彼らの方でも連帯協約を結んだ仲間たちの保有する労働用具の所有に対して共に与るのである。

Ⅳ　コミューン

コミューンは同一地域に住む労働者全体から構成される。大多数の場合に見られるものを典型とし、例外的なものは除外して、われわれはコミューンを生産者諸集団の地域的連合体と規定する。

この地域的連合体すなわちコミューンは、しかじかの同業組合（コルポラシオン）の領域だけに属するのではなく、すべての領域に関与し、この理由で公益事業とよばれるある種の諸サーヴィスを供給する目的で構成される。

コミューンの営む公益事業は、次のように要約することができる。

a　公共土木事業[5]

家屋はすべてコミューンの所有である。

革命が行なわれてからも各人は住んでいた住居に暫定的に住むことをつづける。ただし不衛生な住居やあまりに手狭な住居におし込められていた人たちは、コミューンの世話ですぐに空いたアパートや前に金持のものであった家屋に住むことになる。衛生的で広い便利な部屋のある新しい家屋を建てて古い庶民地区の悲惨なあばら屋に代えることは、解放された社会がまっ先にする必要なことの一つであろう。コミューンはすぐこれに従事し、

このようにして石工、大工、金具工、スレート工、等の組合に労働を提供することができるだけでなく、なお革命前には無為に暮らしてどんな職業も知らなかった多くの者たちに有用な仕事をやりやすくするであろう。これらの者たちは、解放された地方のあらゆる地点、とくに都市で企てられる大規模な建設や土木事業に人夫として雇われるであろう。

新しい住宅は、すべての人々の費用で建てられるであろう。――このことは、建築に関する種々の同業組合が提供する労働と交換に、これら組合がコミューンから全組合員の生計を十分弁じるに必要なだけの引換券を受けることを意味する。そして住宅は、みんなの費用で建てられるため、みんなの用に供されなくてはならない。――すなわち住宅に住むのは無料であり、何びとも住む住宅に対して使用料や家賃を払う必要がないであろう。

住宅が無料である以上、誰も悪い住居にとどまっていたくないし、各自がよりよい住居を得ようと争い、深刻な不和が起こるように思われるかもしれない。しかしこの点について重大な不都合が生ずると懸念するのは誤りであると思う。その理由はこうである。まずはじめにいう必要があるのは、悪い住居に長く住もうとせず、よりよい住居を望むのはたしかにごく正当な欲求であり、まさに強く起こってくるこの欲求こそは、人々が新しい家を建ててそれを満足させるため、いたるところで精力と活動力を傾けて働くことを保証するのである。しかし新しい家が建てられるまでは辛抱し、いまの家で満足しなければならないであろう。さきに述べたように、コミューンは、必要なときには、最も急を要するものの救済策を講じ、最も貧しい家族を最も金持の邸宅に住まわせるように気をつけるであろう。そして残りの住民に関しては、彼らのうちに革命への熱狂からして寛容と犠牲の感情が発達し、各人をしてなおある時間住みごこちの悪い住居での不便を喜んでしのばせ、幸いにも一時より快適な住宅を得た隣人と争いを構えるような考えは何びとにも起こらないであろうと思う。

少しの時がたつうちに、一般的な要求に強く刺激されて働く建築労働者たちの活動のおかげで、住宅は多くなり、すべての需要が満たされ、各自はただ選択すればよく、自分に都合のよい住居を確実に見つけられるようになるであろう。

われわれが語っているのは、ブルジョア社会の水準をこえては決してものが見られない人たちにはどのように不思議に思われるにしても、なんら空想的なことではない。反対にごく単純な、ごく自然なことであって、物ごとはそれ以外には行なわれえないであろう。実際、多数の石工その他の建築労働者たちは、便利で、文明社会の住民が住むに真に値する住宅をたえず建てることでないとしたら、何に専心しようとしているであろか？　各家族が自分の住宅をもつのに、彼らは長年建築にかかることが必要であろうか？　いな、それは短時間の仕事であ

ろう。仕事が完了すると、彼らは腕をこまねいていることになるであろうか？　おそらく、そうではあるまい。彼らは仕事をつづけるであろう。いまの住居を改良し、より完全なものにするだろう。そして現在の都市にある陰気な街区や狭い街路、不便な住居はしだいにまったく消えていき、それにかわって宏壮な邸宅が立ち、そこには人間に回復した労働者たちが住んでいるであろう。

b　交　換

新しい社会には、その言葉に今日付着している意味での商業はもはや存在しないであろう。

各コミューンは交換所を設ける。その仕組みをできるだけ明確に説明するとしよう。

労働者組合ならびに個人生産者（個人生産が継続する部門の）は、その生産物を交換所に寄託する。これら種種の生産物の価値は、統計資料を用い、地方同業組合連合と諸コミューンとの間の協定によってあらかじめ決められている。交換所は生産者に彼らの生産物の価値を表わす交換証券を交付する。この交換証券は、コミューン連合の全地域にわたり流通が認められるであろう。

このように交換所に寄託される生産物のうち、ある物はそのコミューン内で消費され、他の物は別のコミューンに移され、したがって他の生産物と交換されることになる。

前者はコミューンの種々の共同市場に運ばれ、それが市場を設けるのに当座はもとの商人の商店や倉庫のうちで最も便利なものが利用されるであろう。これら市場は、食料品、衣料品、世帯道具類等々にそれぞれあてられるであろう。

移出されるべき生産物は、それらを必要とするコミューンについての指示がくる時まで、一般用倉庫に保存される。

ここで異論を先取りするとしよう。人はおそらくこういうだろう。各コミューンの交換所は、交換証券によって生産者に彼らの生産物の価値を表わすしるしを交付し、しかもこれら生産物の品捌きの保証に先立って、そうするのである。もしそれが捌けない場合には、交換所はどういう立場になるのか？　それは損害を招く恐れがあり、また投機のようなものであって、その負担はきわめて危険ではないであろうか？

これに対してわれわれはこう答えよう。各交換所は、受け取る生産物の品捌きにはあらかじめ確信しており、したがってその代価だけのものを生産者に交換証券で直ちに交付することには何の不都合もありえない、と。

その生産物を交換所に持ってくることが、どうしても不可能ないくつかの部類の労働者も存在するであろう。たとえば、建築労働者がそれである。しかし交換所が彼らにも仲介者として役立つことには変わりないであろう。彼らには自分たちが果たした種々の事業を記録させ、その価値はつねに前もって定めておかれ、交換所は

この価値に相当する交換証券を彼らに渡すであろう。コミューンの行政事務に雇用される労働者たちについてもこれと同様であろう。彼らの仕事は、製品ではなく、果たすサーヴィスにあり、これらサーヴィスに対する賃金はあらかじめ決まっており、それを交換所が払うことになるであろう。

交換所は、コミューンの労働者が持ってくる生産物を受け取る機能を営むだけではない。それは、他の諸コミューンと連絡をとり、その食料の補給なり、原料、燃料、完成品等々としてなり、外部から取得しなくてはならない生産物を取り寄せることもする。

外部から取得するこれらの生産物は、その土地の生産物とならべてコミューンの市場に姿を見せている。

消費者は、交換券をもって市場に出かけ、交換券はさまざまな額の券に分割することができる。彼らは市場で一律の定価表にもとづいて必要とするすべての消費物を手にいれることができる。

これまで交換所の活動について説明してきたことには　現在の商業における慣行と本質的に異なるところは何もない。これら活動は、実際、売り買い以外のものではない。交換所は生産者から彼らの生産物を買い、消費者に消費物資を売る。しかしわれわれは、ある時がたつと、交換所の実際は不都合なしに変えられることができ、新しい方式が古い方式にとってかわるであろうと考える。本来的な交換は消滅し、純然たる分配に席を譲るであろう。

これによってわれわれが理解するのは、こういうことである。

生産物があまり豊かでなく、コミューンの倉庫に住民が消費できる分量より少ししかないかぎりは、この生産物の分配に一定の尺度を持ちこまざるをえない。そしてこの消費の割当てを行なう最も便利なやり方は、生産物を売ること、すなわちそれを一定の価値のかわりに提供する者だけに渡すことである。だが、ひとたび、労働が合理的な基礎の上に組織されるやいなや起こるにちがいない生産の非常な増加のおかげにより、これこれの種類の生産物が住民の消費量をはるかにこえるときには、もはや消費の割当ては必要でなくなるであろう。人々は、節度のない消費に対する一種の抑圧作用であった販売を停止することができるであろう。コミューンの交換所は、もはや消費者に生産物を売らなくなり、彼らが申し出る必要に応じてそれを彼らに分配するであろう。

このように分配を交換に変えることは、すべての第一次的必需品について少しの時がたつうちに可能になるであろう。なぜなら、生産者組合の最初の努力は、とくにこれら物資の豊かな生産に向けられるだろうからである。やがて他の、今日なお稀少高価で、したがって贅沢品とみなされている品物も大規模に生産され、分配すなわち普遍的消費の領域にはいることが可能になるであろう。これと反対に他の少数のあまり重要でないもの（たとえば真珠、ダイヤモンド、数種の金属）は、自然自体がその量を制限しているため、決して豊富にはなりえないであろう。しかしそれらは、今日一般の評価が与えているような価値をそれに認めなくなるであろうから、もはやほとんど科学団体だけから求められるようになって、これら団体は、それらを博物館に陳列するか、あるいはある種の機器の製造に利用するかするであろう。

c　食　料

食料サーヴィスは、いわば交換業務の付属をなすにほかならない。実際、われわれが交換所の組織についていま述べたことは、とくに食料にあてられるものをも含めたいっさいの生産物にあてはまるのである。それにしても、主要食料品の分配に対して採用する処置に関しては、特に節を設けて若干説明をつけ加える必要があると思う。

今日、パン製造業、屠殺業、酒販売、植民地産物は個人企業と投機に任せられており、業者は、あらゆる種類の不正手段を用い、消費者を犠牲にして金儲けをしようとしている。新しい社会はこのような事態にただちに矯正策を講じなくてはならないし、この矯正策は、第一に必要な食料品の分配に関するいっさいの物ごとをコミューンの公的サーヴィスとして確立するであろう。

このことは、よく注意してほしいが、コミューンがいくつかの生産部門をその手に握ることではない。そうではなくて、本来の生産は生産者の組合に止まることに変わりはない。だが、たとえば、パンについてどうしたら生産が成り立つのか？　もっぱら小麦の栽培においてである。農夫は種を播き、穀物を収穫し、それを交換所に運んでくる。そこで生産者の機能は終わる。この穀物を粉にし、この粉をパンに変えるのは、もはや生産の仕事ではない。これは、コミューン市場のさまざまの職員たちが果たす仕事に類する仕事であり、食料品、小麦を消費者に届くようにする仕事である。肉類その他についても事は同様である。

したがってこういうことがわかる。理論的見地からすると、パン製造、屠殺、酒販売等々をコミューンの権限に返させるほど論理的なことはない。

それゆえ、小麦は、いったんコミューンの倉庫に収められると、コミューンの製粉所（いくつものコミューンが同じ製粉所を用いることがあるのはいうまでもない）で製粉され、その粉はコミューンの製パン所でパンにされ、パンはコミューンの手で消費者に渡されるであろう。肉類についても同様であって、家畜はコミューンの屠殺所で屠殺され、コミューンの肉屋で細分されるであろう。ぶどう酒は、コミューンの地下室に貯蔵され、特定の職員をとおして消費者に分配されるであろう。さいごにその他の食料品も、それに対する消費の緊急度の多少にしたがって、あるいはコミューンの倉庫に貯蔵され、あるいは市場に出して消費者の求めに応じさせるで

あろう。

交換の方式を分配する方式に可能なかぎり速かに変える努力をしなくてはならないのは、とりわけこの種の生産物、すなわちパン、肉、ぶどう酒等々についてである。ひとたび豊富な食料が万人に確保されるならば、科学と工業技術と文明一般の進歩は長足な前進をとげるであろう。

d 統　計

コミューン統計委員会は、コミューンに関するすべての統計資料を集めることを任務とする。

種々の同業組合もしくは生産組合は、その組合員や職員の異動をたえず委員会に掌握させ、かくしていつでも生産の諸部門で働かせる働き手の数を知ることが可能になるであろう。

統計委員会は、交換所を介して生産および消費の数に関する最も完全な資料を取得するであろう。

一地方のすべてのコミューンからこのようにして集めた統計的な事実を用いることにより、生産と消費とを科学的に均衡させることが可能になる。これら事実の示すところに従い、生産が不十分な部門に働き手の数をふやし、生産が過剰な部門ではそれを減らすことができるであろう。統計によってまた、社会の需要が要求する生産物の総量を獲得するに必要な平均労働時間を決めることも可能になるであろう。また、交換所の定価表の基礎として役立つべき、種々の生産物の相対的価値を、たしかに絶対的仕方ではないが、実際上十分正確に決定するのも統計によってである。

しかしこれがすべてではない。統計委員会はなお今日戸籍に属する機能をも果たさなくてはならなくなり、出生や死亡を記録するであろう。結婚は加えないことにしよう。というのは、自由な社会では男女の自由意志による結合はもはや公的行為ではなく、純粋に私的な行為であって、いかなる公的承認をも必要としないだろうからである。

ほかの多くの物ごとはいぜん統計の範囲に属する。すなわち、病気、気象観測、さいごに、規則的に発生して記録し計算することができ、その数的集合からなんらかの教訓、ときにはなんらかの科学的法則が出てくることが可能なすべての事実がそれである。

e 衛　生

衛生という一般的な名称のもとに集めたのは、共通の健康にその適切な働きが不可欠なさまざまの公共サーヴィスである。

その第一にあげなくてはならないのは、当然、医療であり、これはコミューンによりその住民すべてが無料で受けられることになるであろう。医師はもはや彼らの患者からできるだけ多くの利益を引き出そうとする職業ではない。彼らは、コミューンの職員であって、コミューンから報酬を受け、必要とするすべての者を治療しなければならない。

しかし医療は、保健に関する人間の活動と知識との部門の治療的側面を示すにすぎない。病人を治すには、これだけでは十分でなく、病気を予防しなくてはならない。これが本来の衛生の働きである。

人は、衛生委員会の注意を引き、それが処置すべきその他多くの事柄をあげることができるであろう。しかしわれわれがいま述べたわずかなことだけでも、その委員会の機能と重要さの性質について大体を伝えるには足りたにちがいない。

f 安　全

これは、コミューンの全住民に身体の安全を保証し、またいっさいの掠奪とあらゆる事故から家屋、生産物等を保護するに必要な手段方策を包括する。

各人が自己の労働の果実によってまったく自由に生きることができ、いっさいの欲求が豊かに満たされる社会においては、盗みや掠奪の事件などおそらく起こるまい。その上、物質的安楽ならびにすべての人々に与えられる真に人間的な教育から生ずる知的・道徳的発達は、放埒、怒り、兇暴、その他の悪徳の結果である犯罪をずっと少なくするであろう。

それにしても、人身の安全に注意することは無用ではない。このサーヴィスは、その名称の意味があまりあいまいでなければ、コミューンの警察とよぶことができるだろうが、それは今日のように特定の団体に委託されはしないであろう。すべての住民がそれに参加し、コミューンの設ける警戒の持ち場で交代に注意することを要求されるであろう。

これに関連して、平等な社会では殺人その他の暴行を犯す者は、どのように扱うかという疑問がおそらく出されるであろう。明らかに、個人の権利の尊重と権威の否定という口実で、殺人者を安らかにしておいたり、あるいは犠牲者の友人に反坐法（加害者に被害者と同じ程度の苦痛を伴う刑を科する法）を適用させることはできないであろう。彼の自由を奪い、社会に復帰しても危険がなくなるまでは、彼を特別の家屋に留めおかなくてはならない。この拘束中彼をどのように扱うべきか？　その期間をいかなる原則によって定めるか？　これらはデリケートな問題であり、見解はいぜんさまざまである。経験に照らして解決しなければならないであろう。だが今からわかっていることは、教育が性格に及ぼす変化の力で、犯罪はごくまれになり、犯罪者は例外でしかなくなり、病人や狂人とみなされるであろう。今日かくも多数の裁判官、弁護士、看守がたずさわっている犯罪の問題は、その社会的重要性を失い、医療哲学のたんなる一章となるであろう。

g 子供は何びとの所有でもない[6]

考慮すべき第一の点は、子供の扶養の問題である。今

日、子供の養育および教育に当たる責任を負うのは両親である。この慣習は、子供をその親たちの所有物とみなさせる誤った原理の結果である。子供は何びとの所有でもなく、彼自身のものである。彼が自分で身を守る力がなく、したがって他の者の利用にさらされている期間中、彼を保護し彼の自由な発達を保証するのは、社会の役目である。また彼の扶養に当たるのも社会の仕事である。彼の消費と教育に必要な種々の費用とを供与することによって社会は、子供が生産者となったときその労働によって社会に返すべき分の前貸しをするにほかならない。

したがって、子供の扶養に当たるべきものは社会であって両親ではない。この一般的原則が立てられたなら、それを適用すべき形態を正確かつ詳細に定めることは慎まなければならないと思う。ユートピアに陥る危険があるだろう。必要なのは自由に活動させ、経験からの教訓を当てにすることであろう。ただいいたいのは、社会はコミューンによって代表され、各コミューンはその子供の扶養に最良と判断する組織を決定しなければならないであろうということである。ここでは共同生活をよしとし、かしこでは少なくともある年齢までは子供を母親にまかせる等のことが行なわれるであろう。

しかし、これは問題の一面にすぎない。コミューンは子供たちを養い、着せ、住まわせる。誰が彼らを教育し、大人にし、生産者にし、また教育はどんな計画によって指導されるのであろうか？

これらの問題にわれわれはこう答えよう。子供の教育は綜合的、すなわち子供を十全な人間たらしめるように、その身体および精神のあらゆる能力を同時に発達させるものでなければならない、と。このような教育は、教育者という特定のカーストに任せてはならない。科学、芸術、技能を知るすべての人々に子供に教えるよう呼びかけることができ、またよびかけるべきである。

教育は二つの等級に分けられる。五歳から十二歳までで、まだ学問を学ぶ年齢には達せず、本質上体力を発達させることが問題である初級と、十二歳から十六歳で、人間知識のさまざまな部門に手ほどきされなければならないとともに、一つあるいはいくつもの生産を実地に覚える中級とである。

初級では、すでに述べたように、本質的には身体的能力を発達させ、身体を強くし、感覚を働かせることが問題であろう。今日人々は視覚を訓練し、聴覚を慣らし、手の熟練を発達させることを、偶然の配慮にまかせている。合理的教育はそれとは反対に特別の訓練によって、眼と耳に可能なあらゆる力を授けることにつとめるであろう。そして手についてはどうかというと、子供たちに右手をもっぱら使うことに慣れさせるように気をつけ、片手を別の手より器用に使わせることにつとめるだろう。

感覚を働かせ、体力を賢明な体育によって増進すると

同時に、精神の教化もまったく自発的な仕方で始められる。一定の数の科学的事実が、おのずから子供の頭に蓄積されるであろう。

個人的観察、経験、子供たちの間の、あるいは彼らの教育に当たる者たちとの会話が、この時期に受ける唯一の授業であるだろう。

学者ぶった教育家にほしいままに支配され、子供たちが自由と学外での遊びをしきりに望むような学校には用がない。子供たちは彼らの集まりではまったく自由であるだろう。彼らは自分たちで遊びや会議を組織し、仕事をまとめる委員や争いを裁く係り等を決めるであろう。このようにして彼らは公共生活、責任、相互依存に慣れていく。彼らが自分たちに教えてくれる者として自由に選ぶ先生は、もはや嫌いな専制者ではなく、喜んで耳を傾ける友だちであるだろう。

第二級では、十二ないし十三歳に達した子供たちは、系統立った順序で人間知識の主要な諸部門を学ぶことになる。その教育は、それを専門とする人々の手には任せられないであろう。これこれの科学の教師は同時に生産者であって、一部時間は筋肉労働に従事するであろう。そして各部門に一人だけでなく、科学に精通し、教える気持のある多数の人々がコミューンの中に数えられるであろう。その上、教授上のすぐれた書物を共同で読み、そのあとで討議することは、今日教育者個人に結びつけられている重要さを大いに減ずるであろう。

子供は、彼の身体を発達させ、知識を習得すると同時に、生産者としても修業するであろう。初級の教育では、遊びの材料を直したり変えたりする必要が、子供に主な道具の取扱いの手ほどきをすることになる。第二期には、子供はいろいろの仕事場を訪れ、やがてどれかの部門に対する好みに引きいれられ、一つもしくはいくつもの専門を自分のために選ぶであろう。研修の親方は生産者自身であり、各仕事場に生徒たちがおり、各労働者が時間の一部を割いて彼らに仕事を覚えさせるであろう。この実際教育に若干の理論教育がつけ加えられるのである。

このようにして十六ないし十七歳で若者は、人間知識の全範囲を一巡し、望むならそのあとの研究を独りでつづけ、さらに職業を習得し、その後有用な生産者の列に加わり、彼の受けた教育が彼に負わせた負債を、社会に返済することができるようになるであろう。

子供とその家族との関係について一言述べることが残っている。

子供の養育を社会の世話にまかせるという社会組織のやり方は、「家族の破壊」以外の何ものでもないと主張する人々がいる。これは意味のないいい方だ。新生児の出産に異性二人の協力が必要であるかぎり、父親と母親とが存在するかぎり、子供と、子供が生命を享けた者たちとの自然的な血縁関係は、社会関係から消滅させえないのである。

ただこの関係の性質は、必然的に変わらざるをえないであろう。古代には、父は子供に対して絶対的主人であり生殺与奪の権利をもっていた。現代では、父権はいくつかの制限を加えられている。したがって、自由で平等な社会においては、今日なお父権として残るものもまったく消滅し、たんなる愛情の関係に席を譲る以上に自然的なことがあろうか？

われわれはむろん、子供を大人のように扱わなくてはならないとか、彼のあらゆる気まぐれが尊重される権利があるとか、また子供の意志と社会の既定の規準や常識とが対立するとき、子供に譲歩するよう教えてはならないとか、主張するものではない。われわれがいいたいのは、その反対に子供は指導される必要があるということだ。しかし幼い年頃の指導は、しばしばその能力がなく、まかせられた権力を一般に濫用する両親だけにゆだねてはならない。子供が受ける教育の目的は、彼のあらゆる能力を大いに発達させることによって、できるだけ早く自主的に行動できるようにすることである以上、狭義に権威主義的ないかなる傾向も、そのような教育方式と両立しえないことは明白である。しかし父と子の関係はもはや主人と奴隷との関係ではなく、教師と生徒、年長者と年少者との関係であるから、それには親子の相互の愛情で十分と考えるであろうか？　反対にそれは、家族が今日かくも多くの実例を提供し、その原因がほとんどつねに父親の子供に加える圧制にあるところの反目、不和がなくなるときではないであろうか？

それゆえ、もはや何びとも解放され再生した社会が家族を破壊するとはいわないことだ。そうした社会は逆に、父や母や子供に愛し合い、尊敬し合い、互いの権利を重んずることを教えるであろう。また同時に、ただ限られた範囲を含み、それに排他的にとどまるならば悪となりかねない家族への愛情とともに、またそれを越えて、より高いより高貴な愛、大いなる人類家族への愛を、彼らに心がけさせるであろう。

連合の網

いまやわれわれは、コミューンや生産者集団の局地的連合という限られた地域を去って、社会組織が、一方では、同一生産部門に属する労働者の全集団を包括する地方的同業組合の結成により、他方ではコミューン連合の結成によって完成されるのを見るとしよう。

……同業組合連合が何であるかはすでに略述した。現在社会の内部にも一職業の労働者すべてを同一組合に包含する数々の組織が存在する。たとえば、印刷工連合がこれである。しかしこれらの組織は、来たるべき社会において同業組合連合となるべきもののきわめて不完全な萌芽にすぎない。この同業組合連合は、同一の労働部門に属するすべての生産者集団から形成され、もはや雇主の貪欲に対して彼らの賃金を守るためではなく、第一

に、各集団が所有し、相互契約によって全同業組合連合の共同所有となるべき労働用具の使用を互いに保証するために、結成される。しかも、集団相互の連合は、それら集団をして生産にたえずコントロールを加え、したがって社会全体の示す必要に応じて多少強度に生産を規制することを可能ならしめるのである。

同業組合連合の結成はきわめて単純な仕方で行なわれるであろう。革命の翌日ただちに、同一産業に属する生産者集団は、互いに情報を知り理解し合うために、一都市から他の都市へと代表を相互に派遣する。こうした部分的協議から、どこか中心地において同業組合代表の一般大会が招集されることになるであろう。この大会は連合契約の諸基準を定め、これらの基準は同業組合に属するすべての集団の承認に付せられる。同業組合大会において選出され、これに責任を負う常設委員会は、連合を構成する各集団のあいだと、同じく連合自体と他の諸同業組合連合とのあいだの仲介の役を果たすことになるであろう。

このようにして、農業生産を含むあらゆる生産部門がひとたび組織されると、すべての生産者、したがってまたすべての消費者を網羅する巨大な連合の網が全国をおおい、種々の同業組合連合の事務局の集計した生産および消費の統計によって、正規の労働時間、生産物の原価と交換価値、ならびに消費の必要に十分なだけの生産高を、合理的に決定することが可能になるであろう。

ある種のいわゆる民主主義者たちの中身のない雄弁に慣れた人々は、おそらく、労働者たちの集団が、同業組合連合を構成する全員の投票によって直接に、これら種種の細ごました物ごとの決定に関与するよう求めるべきではないか、と問うであろう。そしてわれわれがこれに否定的に答えるとき、たぶん彼らは専制を叫ぶであろう。彼らは、かくも重要な問題を一刀両断的に解決し、最高度に重要な決定を下す権限を付与された事務局の権力なるものに抗議するであろう。われわれはこう答えよう。各連合の常設事務局が委託される仕事は、いかなる権力の行使ともまったく共通するものはなく、それが実際に扱うのは、もろもろの生産者集団の提供する資料を集め整理することであり、これら資料がまとめられ公表されると、それから必然的に出てくる、労働時間、生産物の原価等々に関する帰結を引き出すことである。これはたんなる算術計算であり、計算の仕方にも結果にも二つはありえない。ただ一つの結果が可能なだけであり、この結果を誰もが自己のために確かめることができるであろう。というのは、各人が運算の要素を眼の前にしており、常設事務局はただ運算を確かめ万人に知らせることを任務とするからである。今日すでに、たとえば郵政部は、同業組合連合事務局に委託されるべきものにかなり似た業務を営んでいる。そして郵便局が、一般投票にはからずに、手紙ができるだけ速くかつ経済的に宛先に届くよう、それを分類し、包装することに苦情をいおう

とは、誰も考えまい。

なおつけ加えると、連合を形成する生産者集団は、たんなる投票よりも別の有効かつ直接の仕方で事務局の活動に関与するであろう。実際、情報やいっさいの統計資料を提供するのはそれら集団であって、事務局はそれらを整理するにすぎないのである。かくして事務局は受動的仲介者でしかなく、それをとおして各生産者集団は相互にコミュニケートし、それぞれの活動の結果を公けに確認するのである。

投票というのは、科学的データによって解決できない、数の気まぐれな判定にまかせなくてはならない問題を解決するのに、適した手続きである。しかし科学的で正確な解決が可能な問題においては、投票する理由はない。真理は、投票では決められず、その固有の明証によって確証され、ついで万人に課せられるのである。

だが、われわれはまだ、コミューン外の組織については半ばしか説明していない。同業組合連合とならんでコミューンの連合が構成されなければならないのである。

一国だけでは社会主義は存立しない

革命は一国に限られることはできない。革命はその運動のなかに、全世界ではないにせよ少なくとも文明諸国のかなり多くを引きいれることを余儀なくされ、さもないと死滅させられることになる。実際、今日いかなる国も己れだけでは足りない。国際的な諸関係は生産および消費の必然であり、中断されることはできない。もしも革命を起こした国の囲りの諸国家が厳重な封鎖を決立するにいたったならば、孤立のままにされた革命は死滅を宣告されるであろう。かくして、ある国における革命勝利の仮説について論ずるとき、われわれは、ヨーロッパの他の大部分の国々が同時に自国の革命を行なうものと想定せざるをえないのである。

プロレタリアートがブルジョアジーの勝利を顛覆するであろうすべての国々において、革命の打ち建てる新社会組織がそのあらゆる細部にわたって同一であることは不可欠ではない。これまでゲルマン系諸国（ドイツ、イギリス）とラテン・スラヴ系諸国（イタリア、スペイン、フランス、ロシア）との間に意見の相違があらわれている以上、たとえばドイツの革命家たちが採用する社会組織は、おそらく、イタリアやフランスの革命家たちが手にいれるそれとは、いくつもの点で異なるであろう。しかしこれらの相違は国際関係にとって重要なことではない。基本的な原理は双方同じであるから、異なる国々の解放された民衆の間に、かならずや友情と連帯の関係が確立されるであろう。

現在の政府がつくりあげた人為の国境は、革命の前にくずれ去ることはいうまでもない。コミューンは経済的利益、言語の相似、地理的位置によって相互に自由に団結するであろう。そしてある国、たとえばイタリアやス

ペインのように、単一なコミューンの塊りを形成するにはあまりに広大であり、自然自体も多くの異なる地方に分かれている国では、コミューンの単一の連合ではなく、いくつもの連合が建設されるであろう。それは、統一の破壊ではなく、孤立し敵対する小さな政治的国家への旧来の細分でもない。これらさまざまのコミューン連合は、互いに別々ではあっても孤立してはいない。それらの利害は連帯しており、互いの間に結合の協約を結び、実際の功利と、目的および必要の共同性と、好意の不断の交換とにもとづくこの自由意志的協約は、暴力がつくりあげた、特権階級のための国の利用・搾取以外の存在理由をもたない、政治権力集中化の恣意的統一よりもはるかに緊密強固であろう。

同盟協約は、たんに一国の諸コミューン連合間に成り立つのみではない。古い政治的境界が消滅したからには、すべてのコミューン連合が次から次へとこの友愛の同盟に加わり、かくして、大革命の諸原理が全ヨーロッパで勝利を収めたのち、社会革命によってのみ達成される、かの偉大な、諸国民の友愛という夢が実現されるであろう。

1 Fritz Brupbacher（1874—1945）　チューリッヒの医師、一八九八年から一九一四年追放までスイス社会党員、一九二〇年から一九三二年末の追放までは共産党員。心の底ではアナキストたることをやめず、またつねに性の自由のために活動した。著書に『マルクスとバクーニン』（一九二二）、『異端者の六十年』（自叙伝）があり、これらの抜萃はフランス語で『社会主義と自由』の名で出版された（一九五五年）。

2 ジャム・ギヨーム『インターナショナル、その記録と回想（一八六四—一八七八）』四巻、一九〇五—一九一〇年。（再版、二巻、一九六九年）

3 抜萃、副題は編者による。

4 しかしこれら職業でも、大産業の生産方式を採用し、時間と労働を節約しうることは注意しなくてはならない。したがってわれわれが語ることは、過渡期だけにあてはまるのである。（ジャム・ギヨーム注）

5 以下の副題はジャム・ギヨームによる。

6 以下の副題は編者による。